

# 「経験的なもの」の意図せざる結果と理論

—E.フロムにおける権威主義の問題化の過程を通じて—

東京大学大学院/日本学術振興会 魚住知広

## 1.目的

本報告の目的は、エーリッヒ・フロムにおける「権威主義的性格」という概念がいかなる理論と「経験的なもの」から生じたのかを示すことにある。『自由からの逃走』での権威主義的性格の概念はナチズムへの心理的な説明として知られている。しかし、その概念の発端には社会調査による「経験的なもの」の発見があり、その解明のために精神分析の理論に基づく心理的な説明が必要とされた。本報告では、フロムが権威主義を問題化する契機である「経験的なもの」の内実がどのようなものであり、またいかなる意味で理論的説明を必要としたのかを検討する。

## 2.方法

フロムがワイマール期ドイツで 1929 年から 31 年にかけて行った社会調査の報告書である (Fromm 1980)での議論を手掛かりに、それがどのような性質の調査であり、いかなる「経験的なもの」をもたらし、後の理論化へとつながったのかを検討する。また、(Schad 1972)等も参照しながらこの調査が当時のドイツの社会調査の歴史の中でどのような意味をもっていたかについても触れることとする。

## 3.結果

この社会調査の背景には 11 月革命の失敗があり、労働者の経済的・社会的状況と心的構造および文化領域との関係性の経験的な解明が志向されていた。全ての項目が自由記述の調査であり、記述内容を解釈・分類した上で分析が行われた。そこでフロムは表層的な意識と潜在的な無意識の面でのズレという「経験的なもの」を発見した。ラディカルな政治信条を支持する者達も、家族観等のパーソナリティ面では権威主義への同調性を示していた。ラディカルな左派政党が大きく支持を集めていた当時のドイツにおける潜在的な権威主義、という意図せざる「経験的なもの」の発見はフロムがそれ以後権威主義を問題化して探求する契機となった。

## 4.結論

フロムが権威主義を問題化する契機には、社会調査の結果から発見された「経験的なもの」があった。その「経験的なもの」は無意識的次元を想定する理論的前提のもとで分析が行われたことにより発見された。意図せざる「経験的なもの」の解明のために心理的な説明が必要となり、フロイト等の精神分析的な性格学の理論を参照しながら権威主義的性格の概念が発達していくこととなる。権威主義的性格が概念化される過程には、理論的前提に基づいた「経験的なもの」の発見とその説明の段階での理論の導入があり、理論と「経験的なもの」が重層的に関係していた。

## 文献

Fromm, Erich, 1980, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Drittenreiches: eine sozialpsychologische Untersuchung*, Stuttgart: Deutsches Verlags-Anstalt. (=1991, 佐野哲郎・佐野五郎訳『ワイマールからヒトラーへ——第2次対戦前のドイツの労働者とホワイトカラー』紀伊国社書店.)

Schad, Susanne P., 1972, *Empirical Social Reserch in Weimar-Germany*, Paris: Mouton. (=1987, 川合隆夫・大淵英雄監訳『ドイツワイマール期の社会調査』慶應通信.)